

あずみ2 Death or Love

2005(平成17)年2月7日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督=金子修介/原作=小山ゆう/出演=上戸彩/石垣佑磨/栗山千明/小栗旬/高島礼子/平幹二郎/永澤俊矢/神山繁(東宝配給/2005年日本映画/113分)

……見逃していた『あずみ』のパートⅡが完成した。こりゃ何としても観なければ……！ その動機の9割以上は上戸彩を観たいというスケベ親父的視点……？ しかしその結果は大満足！ 原作コミックが大人気というのもうなずけるが、私としては大きく成長した上戸彩に大注目！ 今年はNHK大河ドラマ『義経』でも面白い役を演じているが、10年後には今の宮沢りえのような演技派大女優に成長してほしいものだ！

この映画から私が勉強できたこと……

北村龍平監督による前作『あずみ』(03年)は、予告編を何回か観て是非観たいと思っていたものの、スケジュールが合わずに見逃していたもの。美少女剣士(刺客)、あずみが、太股も露わに、黒いマントをひるがえし、血しぶきを浴びながら多くの兵士たちを斬って斬って斬りまくるというイメージだけはしっかりと持っていたが、その時代背景や刺客となった動機そしてストーリーなどは全く知らないままだった。しかし今回『あずみ2 Death or Love』を観て、さらにパンフレットを読んでもみると、やっとそれらをすべて理解することができた。やはり何事もきちんと勉強しなければ……。

勉強その1 あずみのキャラクター

私が学んだことの第1は、原作が小山ゆうの人気コミック『あずみ』だということ。そしてこの小山氏の信念は「キャラクターがすべて」だと考えているとい

うこと。つまり、「使命感」に燃える美少女の刺客「あずみ」というキャラクターが最も大切であり、そのキャラクターさえ確立すれば、「チャンバラストーリー」は後からいくらでも作り出せるということだ。たしかにその通り！

この映画では、あずみは仲間のすべてを失うものの、最後のターゲットである真田昌幸（平幹二朗）の殺害に成功し、1人去っていくわけだが、あずみさえ生き残れば今後「あずみ3」の物語はどのようにでも作り出せるはずだ。

勉強その2 金子修介監督とは？

2月7日の試写室からの帰り、私にはある1つの出会いがあった。あいさつをし、ちょっとした会話を交わした程度だが、昼間の時間帯に試写室に来ている人たちは私以外は当然すべて業界関係者。彼の説明によると、この映画の監督である金子修介氏は年1回コンスタントに作品を発表している有名な監督とのこと。たしかにパンフレットを見ると、金子監督は1995年からの『ガメラ』シリーズが有名で、毎年のように作品を発表している。私がそういう方面の映画に全然興味がなから知らなかっただけで、この『あずみ2』の作り方を観ていると、なかなかしっくりしたもの。あらためて次回作を注目したいものだ。

赤胴鈴之助とあずみ

今の若い人たちは知らないだろうが、今年60歳の還暦を迎えた1945年生まれの子吉永小百合が少女時代（1957年から）に出演していたのが、大人気マンガをラジオの連続放送劇としていた『赤胴鈴之助』。これは月光仮面と並ぶ当時の2大キャラクターだ。その時代、私はまだ小学校の1～2年生だったから、そのラジオ放送は聴いていない。また、1957年以降全9本製作された赤胴鈴之助の映画は、松山で何本か観た記憶があるが、そのストーリーは断片的にしか覚えていない。しかしマンガのストーリーや登場人物たち、そして何よりも赤胴鈴之助のキャラクターは今でもしっかりと覚えている。

小学校低学年の時、警察署にあった剣道の道場に遊び半分で稽古に通っていた私は、黒板屋をやっていたおじいちゃんの家でベニヤ板を曲げて「赤胴」をつくってもらい喜んでいたこともよく覚えている。

子供の頃、1つのマンガから得る刺激や楽しみはすごく大きいもの。そして良くも悪くもそれがその人間の人格形成に大きく寄与することはまちがいない。『あずみ2』に登場する黒ずくめの敵役たちは、顔に変な「つけモノ」をしていたが、その姿は私が小学校低学年の頃に観たあの赤胴鈴之助の敵役たちと全く同じイメージ……。今の小学生たちが『あずみ』や『あずみ2』を観た時、彼ら彼女らは美少女刺客あずみのキャラクターや物語から一体どんな影響を受けるのだろうか？

あずみの使命とは？

あずみのキャラクター形成に大きく寄与しているのは、幼い頃から仲間たちとともに訓練を受ける中で教わってきた「使命感」。刺客に与えられた使命とは単純に人を殺すことだが、なぜそれをやるのかを自分に納得させるについては、使命感が必要。あずみが教わったその使命感とは、「戦（いくさ）をなくすために人を殺す」ということ。この使命感がホントに正しいものかどうかは十分検討しなければならないが、少なくとも『あずみ2』までのあずみはこの使命感に忠実な刺客。というよりも、この使命感に疑問を持たば、自分が今まで生きてきたことの基盤を失うことになってしまうという立場。しかし、その使命感にもとづいて最後のターゲットである真田昌幸を殺した後、あずみはどのようにして生きていくのだろうか？ いつかきっと、あずみはこの使命感の是非について自分の頭で考えなければならない時がくるはずだ。

脇も面白いキャラのオンパレード！

「キャラが命」と明確に断言し、美少女刺客あずみというキャラクターを確立させた原作者、小山ゆうだけに、このストーリーに登場してくる人物たちのキャラもそれぞれ明確で興味深い。その第1は、あずみの仲間の中でただ1人生き残っている、ながら（石垣佑磨）。彼との二人三脚での使命達成の道はどこまで続くのだろうか？

第2は、野盗軍団である金角、銀角らのグループ。その銀角がかつてのあずみの初恋の男、なちにそっくりという筋書きだ。

第3は、あずみの友人で新米の伊賀忍者、こずえ（栗山千明）。かわいい顔をして、あずみたちに協力しているが、実はこれが曲者……？

あとは大人たちの世界で、徳川 VS 豊臣という大きな対立構造の中にそれぞれが位置している。徳川側のボスは、あずみたちに指令を下す南光坊天海（神山繁）と、それを支える伊賀忍者の服部半蔵（宍戸開）。豊臣側は九度山に蟄居させられている真田昌幸とその息子・幸村だが、ここに彩りを添える面白いキャラが高島礼子演ずる空如。彼女は「くのー」であるとともに昌幸の愛人として忠誠を尽くしている熟女という役柄だ。そのユニークな衣装にも注目しよう！ その他、その周辺にもいろいろと面白いキャラの人物たちが登場する。歴史上の事実と反するストーリーがいっぱい出てくるが、もともとのネタはコミックだから、そんなことはまあ目をつぶろう。一般的に馴染みの深い名前をうまく使って適当に面白くなるようにストーリーを組み立てればいいのだから……。

ちょっぴり女っぽくなったあずみに感心！

『あずみ2』には「Death or Love」というサブタイトルがついているとおり、斬って斬って斬りまくるという面だけではなく、少し女っぽい（艶っぽい）面が描かれている。これには、北村龍平監督と金子修介監督の視点の相違の他、上戸彩が17歳から19歳に成長したことが大きく影響しているだろう。つまり、上戸彩が少女から女へと変身しようとしている過渡期にあるということだ。刺客と恋人というのは、水と油のようなもので両立し得ないことは明らか。しかし少しそういう雰囲気を見せるだけでストーリーに膨らみが出てくることはたしか。

また、いくら刺客といっても、イケ男を見ればイケナと思うのは当然のこと。まして、初恋の男であるにもかかわらず修行のためにこれを斬ってしまったあずみにとって、なちとそっくりな男、銀角に突然出会えば、女心が乱れても当然……？ こんな微妙な感情＝女ゴコロを19歳の上戸彩が結構うまく演じていることに感心！

2005(平成17)年2月9日記